
アナタ日和

B A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナタ日和

【Nコード】

N8943Z

【作者名】

BAN

【あらすじ】

男目線の恋話

作者の過去を振り返りながら書きました。

結構、荒れた人生ですが、学び取る物もありました。

ある病を背負っていますが、僕のこの話を読んで

誰か共感して、誰か前に一歩進めれば、幸いです。

キミは一人じゃない、生きている。
幸せは得るものじゃない、気付くものだ。

気軽に読んで行ってください。

感想をくれると、次話の更新速度が上がりますw

誹謗中傷はご勘弁ください。

文章力が無いのも重々承知です。

本当にただの自己満足です

プロローグ（前書き）

男目線の恋話

作者の過去を振り返りながら書きました。

結構、荒れた人生ですが、学び取る物もありました。

ある病を背負っていますが、僕のこの話を読んで

誰か共感して、誰か前に一歩進めれば、幸いです。

キミは一人じゃない、生きている。

幸せは得るものじゃない、気付くものだ。

気軽に読んで行ってください。

感想をくれると、次話の更新速度が上がりますw

誹謗中傷はご勘弁ください。

文章力が無いのも重々承知です。

本当にただの自己満足です

プロローグ

〃 〃

枕元の携帯が音楽を流し始める。

「ん…、ツサイな…。」

携帯を取りディスプレイを眺める。

後輩の名前がそこにはあった。

「もしもし…。」

「もしもし亀よー…。」

「先輩ノリ悪っ！」

ベッドから起き上がり、煙草に手を伸ばし、火を点ける。

「なんだ？朝から。」

「えええ！？、先輩が起こしに来いと…。」

「ああ…、悪い。」

事情を把握した俺は服を着替える事にした。

シャワーを浴びて、軽く髪の毛をセットする。

適当なパーカー着て、その上に学ランを羽織る。

玄関に降りて、靴箱の上にある鍵を手に取り、外に出る。

ポポポポ…。

数台のウルサイ単車と数名の後輩達。

「おはよ。」

眠気眼で声を掛けると数名の後輩が笑顔で迎えてくれた。

「じゃあ、行きますか？」

後輩の後ろに乗ると、朝日が眩しい世界へと走りだした。

近くの駐車場に着くと、そこには真つ青なスポーツカーがある。

日産 S15シルビア

足回りとブーストアップとフルエアロ装備のドリフト仕様である。

鍵を向けると軽快な音と共に扉のロックが外れる。

「先輩、単車にしませんか？」

俺の車を眺めながら、笑いながら後輩が言う。

「ま、俺がお前に抜かれたらな。」

そう言うと後輩は少し悔しそうに黙った。

「先輩、単車でも馬鹿なのに…。」
ボソツと後輩が呟いた。

それをきちんと耳に捉えた俺は、バケットシートに乗り込みながら無視しておく事にした。

そして、キーを差込み、回す。

このシルビアは先輩に譲ってもらった車で、勿論、無免許である。

マフラーを交換してある為、俗に言うウルサイエキゾーストを奏でながら、シルビアは始動した。

同時に煙草に火を点け、徐々に上がる水温を眺めて、待つ。

「先輩つ、先に行つときます!」

「おー、抜かれないようにな。」

「出来る限り頑張ります。」

そう残して、後輩達は先に行く。

チューニングされた車は彼女と一緒にだ。

些細な事を気をつけてあげなければ、すぐに壊れてしまう。
だが、それが良いのかもしれない。

(…水温、…油温、…排気温、…電圧、…ブースト圧…、オールグ
リン…)

アクセルを軽く2・3度蹴る。

けたたましい音を奏でながら、マフラーが吼える。

(いくよ、相棒。)

ギアを一速に叩き込み、クラッチを蹴る。

シートに体が沈み込む。

この感覚がどうしてもやめれない。

信号交差点が青なのを確認すると、サイドを引きながら、クラッチ
を蹴り、白煙を上げながら交差点を曲がる。

あとはアクセル全開だ。

暫くすると、単車が数台見えてきた。

(捉えた…)

そのままギアを順々に上げていき、横を抜く。

(お先に…)

前に出るとブレーキランプを数度光らせ、そのまま学校へと向かう。

学校に着き、エンジンをクールダウンさせながら、後輩を待ってい

ると、玄関から友達が出てきた。
エンジンを止め、鍵をかけると、友達を迎える。

「よお、相変わらさずうるせえし、校門に白煙上げながら入ってくるなんて、馬鹿だろう?」

「ああ、それは自分でも分かってる。」

「大人しく単車にしとけて。」

「寒いからヤダ。」

と、友達と軽口を交わしながら、後輩を待つ事を忘れ、学校に入っていく。

階段を上り、教室に近づくと、ガヤガヤと喧騒が聞える。

「…はは!、…でさー?」

(うるせえ…)

こうして、一日が始まっていく。

1：奇妙な俺と奇妙なあいつ

ガラガラッ

教室の扉をうざったそうに開けた男。

身長は約170cm 体重49kg

幼い顔ながら、髪の毛は黒をベースにした赤のメッシュが散りばめられた髪型。

一見ではちよつとチャラそうに見えるが、まさか車で学校に…、とは誰も思わないであろう男。

だが、明らかに彼を取り巻くオーラは異質だった。

教室は一瞬の沈黙に包まれるも、すぐに元の喧騒を取り戻し始めた。

(毎回毎回…。)

カバンも何も持たずに登校する彼は、学校に来る理由は特に無かった。

窓際の一番日当たりの列に一つだけ、灰皿の置いてある机があった。彼はそこに座ると、すぐに腕を枕に寝始める。

……キーンコーン…

(昼か…。)

途中の4時間を寝続け、更なる安眠を求めて、一人で保健室に向かう。

喧騒から離れ、別棟にある保健室。

あまりに眠い場合はすぐに此処に来てしまおう。

部屋に入るといつも先生が座っている席に見知らぬ制服を着る一人の女の子が居た。

(誰…?)

暫く呆然と眺める俺。
ガッツリ目が合う。

(まあいいか…。)

華麗にスルーし、ベッドに倒れ込む。

「えっ、放置とか無くない!?!」

そう言うとその女は俺が倒れ込んだベッドの隣のベッドに腰を掛けた。

「ああ…、面倒な事は嫌いなんで…」

(兎に角眠いんだ…。)

「それは私が面倒な人間に見えるって事!?!」

「かもな…、とりあえず、ウルサイから声のトーンを落としてくれないか。」

「あつゴメンゴメン。」

「てゆうか、明らかに他の学校の制服を着た女が、こんな真昼間に此処の保健室に居る時点で、面倒臭くない訳がないじゃないか？」

「ああ、まあそれはそうだよな。」

笑いながら答えるその女。

良く良く見れば、まあブサイクではない。

綺麗ではないが、可愛い系な部類に入ると思う。

「で、何、此処に彼氏でも居るの?。」

「秘密ー」

(あれ、語尾に星マークが付いてたか?)

語尾に星マークが付いても可笑しくないテンションで答えるその女。

俺からすれば睡眠妨害の何物でもない。

「ああ、そつすか、此処のベッドで、そーゆー事するんだったら、俺が居ない時に頼む。」

「何変な事言つてんの!？」

「ま、とりあえず、寝る。だから静かにしてて。」

「此処は病人が寝る所…。」

ボソボソと呟くその女。

(そつ言いながら、静かにしてくれるんだ。面倒な子ではなさそうだ。)

「てか、見た目に反して凄く静かだね!？」

(…前言撤回。めんどくせえ…。)

「何、それはチャラいつてことか?。」

「いや、中学生に思えないって事。」

「ああ…良く言われる。」

「第一、此処の中学校自体、変だよな？」

「何処が？」

「朝から単車で登校してる子は居るし、拳句の果ては車だよ？。しかも真つ青なスポーツカーでめつちやウルサイの！。凄いスピードだし、一体どうなってんの？ここ。どんなヤンキーがああ車運転してんだか…。」

（おお、良く回る舌だこと。）

一気にまくし立てて来るその子を横目に、煙草に火を点ける。

「居るじゃん、ここに。」

「へ？何が？」

「凄いスピードでウルサイ音を奏でながら車で登校する人間。」

「ええええええええ！？」

（ウルサイ…）

軽く耳鳴りがする高音。

「ま、そうゆう事、寝る。」

「ええ！？そんな爆弾発言して、寝る！？」

「え？だつて事実だし。ていうか…。」

「ん？」

「俺の車はうるさくねえっ！速くて何が悪い、早くて悪いのは早漏だけだからあつ」

「キレル所変！途中いらなくないっ！？」

あーだこーだと言い合ってる内に寝れなくなった俺は帰る事にした。ベッドから起き上がり、何も言わずに帰る俺。

「あつ、待つて！」

「何？。」

「携帯教えて！」

「は？持っていない、おつかれ〜」

「嘘、今時持っていない中学生の方が珍しいし、キミ、さり気なく弄つてたよね、携帯!」

「意外に見てやがる…。ったく。しょうがない、ホラ。」

諦めて携帯を差し出す俺。

凄い笑顔で受け取る女。

女に任せ、自分は煙草に火を点ける。

「うわあ、女の子のアドレス殆どないっ。」

「何見てんだっ!。」

「だって〜。」

「だってじゃない!。」

「はい、出来た。」

携帯を受け取った自分は、早速アドレスを開く。

(新しく、増えた…。って!!)

「誰がハートマークを入れてるんだ?。」

「えへへ〜。」

少し照れた様な顔で言う女。

(くっ、不覚にも可愛いと思ってしまった。)

「マユミ、ね。了解。」

「そっ、宜しくね!。悠君っ。」

それが始まり。

この後に、俺に恋愛の喜びを教えてくれた女の子だ。

2:…とある日の日常的な出来事。

変な女と仲良くなった。

家に帰った自分は、ベッドに寝転びながら、携帯に新しく増えたアドレスを眺めながらそう思った。

俺の中学校に、別の学校の制服を着て、保健室に居る女。

人懐っこくて、元気で、辛い事なんてこの世には無いと思っているくらいの笑顔で話しかけてくる女。

今日の保健室での会話を思い出す。

少し笑ってしまう。

けれど、すぐに回想は終わり、今日は全然寝れなかったので、いつもより早めの睡魔が俺を襲い、そのまま寝てしまった。

AM 8:00

朝を迎え、起きる。

(うわ、こんな時間にアラームも呼び出しも無しで起きたの久しぶりだ…。)

昨日は学ランのまままで寝てしまったので、とりあえずシャワーを浴びて、新しい服を着て、軽く髪の毛を整え、学校へと向かう。

(こんな時間に行って、何もする事ないんだが。)

とりあえず学校へと向かい、いつもの所へと車を停めると、走って駆け寄ってくる一人の後輩。

「先輩っ!。」

バケツトシートから体を出し、煙草に火を点けると、後輩の顔の色が青いのに気がつく。

「何だ、どうした。」

明らかに焦った顔の後輩は、膝に手を付き息を整えながら喋り始めた。

「えっと、ユウスケさんが、何だか別の中学校の奴等にランチにあつたみたいで、今病院に入院してるらしいんですよ!。」

「は?あいつが?、そんな簡単に...?。」

「いや、それが、なんだか凄い人数にやられたみたいで...。」

「ちい、またか。どうせ第一中だろう?。」

「はい...。で、どうするんですか?。遠藤さんはいつもの人達を集めて昼くらいに第一に向かうみたいですが...。」

「は?遠藤が?...、あんな弱小中に動くのか?...。なら...、ヤバイな。」

「何がヤバイんですか?。」

煙草を地面に捨て、靴で踏み消す。

そして、ズボンのポケットから携帯を取り出し、アドレス帳を開きダイヤルする。

3コールくらいすると、すぐに相手は出た。

「もしもし。」

ザワザワとした中で声が聞える。

「もしもし、ヒロキか、学校に居るんだろう。俺の車の所に来い、

すぐに。」

用件だけ伝えるとすぐに電話を切る。

「何で呼んだんですか?…。」

後輩が心配そうな顔で聞いてくる。

「まあ、ちょっと待っとけ。」

数分すると玄関から、やたら身長の高い男が出てきた。

「なんだよ、悠。」

「悪いな、急に呼び出して。」
「いや、いいけどさ、暇だったから。」

「理由は車の中で話すから、とりあえず乗って。」

「ちょ、待ってくださいよ、先輩?どうゆ「いいから乗れ。」
「俺11番なのに…。」

呟きながらしぶしぶ従う後輩。

助手席にヒロキ、後ろに後輩のハヤト。

乗り込んだ二人、少し顔が引き攣っている。

「どうした?、そんな顔で。」

「「いや、お前(先輩)の車…。」」
「行くぞ。」

ギアを一速に叩き込みクラッチを繋ぐ。

校門を一気に駆け抜け、3車線の大きな道路に出る。

9時過ぎという事で、あまり車は多くはないが、飛ばせる程車は少ない。

「10分以内だ…。そして、第一中のいつもの奴等を俺ら3人で沈める。分かったな二人共。」

「は？こんなに車が居て10分以内に着けるん？」

「そうつすよ、先輩。ていうか、僕は11番だし、ヒロキさんだつてシングルナンバーですけど、それで第一を相手にするには少な過ぎますよ…。」

「まあとりあえず、行くぞ。」

「「へ？」」

今まで40/km程度で流していたシルビア、ギアは3速。

ヒール・アンド・トウで1速まで落とし、シートに沈み込ませようとするGに快感を感じながら一気に加速する。

速度5秒足らずで120/kmまで跳ね上がる。

「「いやいやいやいや…。あああああああ！！」」

100/kmオーバーのスラロームを開始する。FRは高速域に入つて行く程安定しない。

それにドリフト仕様なので、オーバーセッティングだ。

だが、チョンブレでフロントに加重を寄せて、右へ左へと高速スラロームを可能にする。

そのまま曲がり角直前でフルブレーキングに入り、クラッチを蹴り、速度を乗せたままドリフトに入る。

乗った二人は単車しか乗り慣れていない為、横から来るGに悲鳴を上げている。

(8分半…。)

第一中学校、校門前。

熱くなったエンジンとターボをクールダウンさせながら煙草に火を点ける。

「ないわ…。」

「ないです…。」

うな垂れている二人。

「いつまでも、単車なんて乗ってないで、さっさとこっちの世界に来いよ。」

「無理だっ(です)!!!」

「さてと、行くぞ…。この車はあいつらに知られてるからな…、お出迎えみたいだぜ。」

バタンツ バタンツ

煙草を啜えたまま、ドアを閉め、出てくる3人。

第一中学校の校門入ってすぐの駐車場には早くも増え始める人。ベランダから眺める男や女の数々。

「先輩、本当に行くんですか…?」

「まあな。面倒な事になる前に片付ける。」

「3人なんスよ、3人…。」

「まあまあっ。」

ヒロキが後輩の肩を叩く。

駐車場には15人くらいの人数が集まっていた。

「ったく、どいつもこいつも人数だけは立派なもんだ…。」
呟く俺。

校門を3人でくぐる。

集団から、リーダー格らしき男が出てくる。

身長はヒロキと同じくらいであるが、幾分かガタイが良い。

「ウルサイ車が校門の前に居るって言うから来てみたら…てめえは…。」

「ああ、ユウスケがキミらにお世話になったみたいで、ご挨拶に、
と思ひまして。」

軽く見上げる格好で話す俺。

「アイツが俺らにガンを飛ばしてるから、返事をしたただけだったの。」

「へえ、お得意の集団殺法ですか？相変わらずですね。」

「ああ？馬鹿にしてんの？今日はこっちの頭が来てないからって調子に乗るなよ？」

「オタクらの頭が云々っていうか…、こっちの頭が云々を気にした方が良いかと…。」

「ねえ、ヒロキ先輩、大丈夫なんすか？悠さんにだけ任せて…、相手すげえでかいっすよ？」

俺の後ろでヒロキに心配そつに聞くハヤト。

「ああ、ハヤトはしらのかいね。」

「何をつすか？」

「悠をさ。」

「は?。」

……

徐々に相手が熱を帯びてきた。

「ゴチャゴチャうるせえっ!!。」

「この程度の会話に付いて来れないなんて、なんて知能が… っと。」

相手の顔面に向いたパンチが飛んできたが、横に避ける。

「先輩っ!」

「悠っ!」

駆け寄る二人。

相手はもはや話が出来る様な状態では無いみたいだ。

「先輩：本当に3人で?…。」

俺は相手を視線に真っ直ぐ据え、答えないでいた。
相手の後ろの奴等も臨戦態勢だ。

「ハヤト、悠を良く見ておけよ。」

「え?」

肩に手を置き、呟くヒロキ。

俺は真っ直ぐ前を見たまま、ヒロキに話かけた。

「いつものように頼んだぞ。」

「ああ。」

状況が分からないハヤトの目は二人の間をいつたりきたり。

学ランの胸ポケットから煙草を取り出し啜える俺。

そしてジツポで火を点ける。

左手を後ろに右手を真つ直ぐ伸ばし相手に。

腰を軽く落とす、右足を前に左足を少し後ろにして軽く左を向いた状態に。

手のひらを空に向け、構える。

「口で分からないなら、体に教えてやるよ。こい。」

クイクイと指を曲げて挑発する。

ベランダからの観衆はヒートアップを始め囃したてる。

「こっの、糞チビがあああ！」

「しゃあああああああ！……！」

「ちょ、先輩っ！！」

焦るハヤト

「っしや、楽しくなってきたっ。」

顔が笑顔なヒロキ

走ってくる奴等を正面に据えたまま俺は、リーダーっぽい奴の右パ
ンチを軽く体勢を沈めて、起き上がる勢いを乗せた膝を腹にいれる。

「っ！」

空気と共に声にならない声を漏らす相手。

そしてクの字に折れた相手の顔に左足の太もとふくらはぎを使って挟み、捻り倒す。

そのまま、そいつは放置して、後ろから走ってくる雑魚Aのパンチを左手で止めて、そのまま捻り、膝をわき腹へ、そして、一旦沈み、下から顎を蹴り上げる。

真後ろへとぶつ倒れる雑魚A。

横から来る雑魚Bへと体を回しながら、足裏での蹴りを入れて飛ばす。

蹴りを入れた状態へと向かってくる相手へもう一度沈み、足を払う。倒れた相手へと、前宙しながら力カトを落とす。

片足を伸ばし座り込んだ状態の俺。

「悠っ、後ろ！」

ヒロキが叫ぶ。

状況を把握した俺は、そのまま後ろへと回転しながら相手を視認し、逆立ちの要領で両足で蹴り飛ばす。

そして、立ち上がりもう一度構える。

何人が尻込みした様だが、それでも圧倒的人数差に気を大きくした相手は向かってくる。

左腕で相手のパンチを払い、顎へと掌底で顔を跳ね上げる。

そして、持った相手の左の袖と相手の襟を掴み、投げ飛ばす。

後ろへと、少しムーブシフトし、向かってくる何人目かの相手へ飛び膝蹴りを入れ、そのままの勢いで次の標的へ向かう。

「な、なんなんスカあれ…。」
呆然と立ち尽くすハヤト。

「あれが、悠だ。」

「化け物つしよ、あんなスマートな体型で飛び回って、まるで映画のシーンを見てるような…。」

「だろう？それであいつ、学年一位の学力だぜ？まるで、少女漫画の主人公だよな。」

「そう…ですね…。」

「ただ…。」

「ただ？」

「あいつが戦っていると、ある癖が出るんだよ…。」

「癖？…。」

「お、そろそろじゃないか。見てみるよ…。」

俺は相手に掴みかかりヘッドバットを決めながら叫ぶ。

「ヒヤハツ！ もっと来いよ！」

右側頭部へと蹴りをいれる俺。

「まだまだだろお？こんなもんかお前等は！？クツクツクツ…。」

「…………悠さん、笑ってる？」

「ああ…、俺らで呼ぶバースーカー状態に入っちゃまうんだよ…。」

「何か問題でも？…。」

「いや…、別に問題は無いんだが、良く考えてみる、あれが味方だから良いものの、あれが敵で笑いながら襲いかかってくるんだぞ？。喧嘩が、こうして傍から見ると、一方的な殺戮に見えてこないか？…。」

「確かに…。」

「で、拳句の果てに、他校の奴等から付いた異名が、笑う悪魔、青い悪魔。」

「悪魔…っすか…、てか、二個目は車の色っスね。」

「ああ…。俺らの頭も大概だが、あいつが一番異色だ。」

「てか、俺頭を知らんのんスけど、悠さんは何番なんですか？。ヒロキさんが6番ってのは知ってますが…。悠さんは集団戦の時に出て来るんスけど、いつつも後ろで車のボンネットに座って煙草吸ってるだけで、喧嘩に参加してるの見た事無いんで、こんなに強いとは知らなくて…。」

「そうだな…。あいつは面倒な事が嫌いだからな。頭は全部悠任せな所もあるから、お前が見た事も無いのも頷ける。」

「って、あんなのより強いんですか？ウチの頭は。」

「悠と頭が本気でやりあっている所を見た事は無いが、悠曰く、）
疲れた、面倒臭え…）だとよ。」

「それは？…。」

「多分、本気で行けば勝てるだろうが、仲間内のナンバーなんて気にしてないから、どうでも良くなったんだろうな。」

「はあ…。どんだけなんスか？あの人…。」

「ハヤトはやりきれ無さそうに煙草を吸い始めた。」

「で、あいつのナンバーは…形は3番だ。だが実際のナンバーは…。」

「形だけ？…実際…？。」

「らあっっ！どうした！？そんなもんかてめえらッ！もっと俺を楽しませてくれよッ！」

後ろ飛び回し2連蹴りでリーダー格をぶっ飛ばす俺。

「実際のナンバーは……。」「
煙草に火を点けるヒロキ。」

「ナンバーは？」

「ゼロだ。」

「ゼロっ！？なんスか、その厨二病みたいなナンバーは。」
思わず笑うハヤト。

「そうだな、確かに笑っちゃまうナンバーだよな。だが、見ろ、終わ
ったみたいだぞ？。あの状況を見て笑えるか？……。」

うづくまる奴等の中に立つ俺。

ベランダの観衆は息が止まったように静かだ。
何人かの女子は口に手を当てて絶句している。

「……息一つ上がってない？……。」
啞然とするハヤト。

「で、こっからが俺の役目だ。あいつの蹴り技を掻い潜って目を覚
まさなければならん……。」
「ええええ？」

走りだすヒロキ。

向かってくる相手に無意識に手を出す俺。

「終わったぞっ悠っ！っ、俺だ、ヒロキだっ！」
蹴り技を繰り出し始める俺。

「ったく、はよ、気付けこらっ。ちよっ、つぶな！」
しゃがんで避けるヒロキに残った足で蹴りを入れる俺。
その足を受け止めて掴むヒロキ。

「あ…、スマン…。」

一旦動きが止まった事で気付く俺。

「ったく、毎回毎回、大人数相手になると暴走するその癖、どうにかならんのか？。疲れた所に、更にお前の相手するのは御免だぜ。」

「そうだな…、気をつけてはいるんだが…。」

「まあいいが、お前のお陰で俺等は楽をさせてもらっているからな…。」

共に立ち、共に並び立つ二人。

駆け寄ってくるハヤト。

ベランダの観衆は一斉に歓声を上げた。

俺達が、鎖を解き放ったようだ。

「うるせえ…、こいつらも皆に嫌われてるだけの不良だったみたいだな。」

地面で唸る第一の不良を眺めながら言う。

「まあ、俺等みたいなのが特殊って事だよ。」

「先輩達シングルナンバーは、ウチの学校では女子からの注目の的ですからね。」

「はあ…、俺はシングルナンバーじゃないよ、13番だよな、な、ヒロキ。」

「そうだな、お前は面倒な事にはまったく動かないからな。まだ、パシリにでもなる13番の方がナンバーズらしいよ。」

「どつゆう意味だそれ。」

「そつゆう意味だよ。」

笑うヒロキ、不満な俺。

「先輩はゼロなんでしょ？」

唐突に言うハヤト。

「てめ、ヒロキ、言ったな?。」

「いや、言わずにどうやってあの状況を説明しろと?。」

「まあいいか。ハヤト、形は俺は3番だが、基本的に3番以下が面倒な事を処理する事になってる。だから、俺が動いたのは内緒にしとけ。今回、うちの頭が出るって聞いたから、こうやって出てきたが。俺が動く事はあまり無い。」

「え?面倒な事が嫌いなのに、今回みたいな面倒な事は処理するんすね?。」

「本当に面倒なのは、ウチの頭が出てきた時のほうが面倒なんだよ

…。」

ヒロキが補足する。

そして、煙草に火を点けた俺。

「ま、お前もその内分かるさ。11番だが、お前はもつと上にいける。」

「そうっすか?、全然自信が湧かないっすよ。悠さん見てたら…。」

「こいつは色々な意味で馬鹿だから気にするな。」

「どうゆう意味だ…。」

「そうゆう意味だよ。」

笑うヒロキ。結局不満な俺。

……ウオンウオン! ゴアッゴアッ!

遠くで単車の音がする。

「お、この上の連中か?面倒な事になる前に帰るぞ。」

「うい。」

「はいっ。」

車に乗り込み、スピードを上げて去って行く3人。

ベランダからそれを眺めて居た一人が教室にゆっくりと戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943z/>

アナタ日和

2011年12月29日02時55分発行